

会計人のターニングポイント

専門性をもって生きることの幸せ

早稲田大学商学大学院教授・博士(経済学・東京大学) 辻山 栄子
(つじやま えいこ)

プロフィール 1976年東京大学大学院経済学研究科博士後期課程単位充足。武蔵大学経済学部教授等を経て2003年4月より現職。国税審議会会長、政府税制調査会特別委員、金融審議会委員、企業会計審議会委員、企業会計基準委員会(ASBJ)委員、公認会計士・監査審査会委員、IASB基準諮問会議SAC委員等を歴任。現在、複数の上場企業の社外取締役、社外監査役を務める。主な著書:『所得概念と会計測定』(森山書店)、編著『IFRSの会計思考—過去・現在そして未来への展望』(中央経済社)など。



■なぜあの本が売れてるの!?

昨年の10月に上梓した編著の予想外の売れ行きに驚いています。本のタイトルは『IFRSの会計思考——過去・現在そして未来への展望』(中央経済社)。1月末にはアマゾンの国際会計部門のベストセラー1位になったものの、たった数日間で品切れになり、たちまち中古品の出品だけになってしまいました。もっとも、もともと研究書という地味な扱いで、発行部数もたかが知れていますが、ベストセラーというのもおこがましいのですが。

出版前には売れ残りの心配をしていたので、ホッと胸をなでおろしている反面、この不思議な現象をどのように理解したらよいのか、正直戸惑っています。ひょっとするとこれは、いま会計の世界に身を置いている多くの人々が、昨今の企業会計を取り巻く環境に漠然とした違和感を覚えていることの裏返しかもしれないと思うと、複雑な心境です。

『IFRSの会計思考』
(中央経済社、2015年)



■時代とともに変わる会計学

私が会計学に出会ったのは、いまから半世紀近く前の大学時代の授業でした。当時の会計学の授業では、ほとんどの時間が「企業会計原則」の解説に費やされていました。現在、私が学部授業で担当している財務会計論のカリキュラムと比較すると、4単位30回のうちのせいぜい5回分、総論に相当する部分だけが1年間の講義内容だったということになります。

現在では、30回の授業のうち25回は個別会計基準(各論)の解説に費やされていますから、隔世の感があります。現在の日本の会計基準のほとんどは1990年代の会計ビックバン以降に作られたものですから、それは当然といえば当然のことだったといえます。なにしろ当時は、まだ日本に連結財務諸表制度すら導入されていなかった時代です。では、当時と比べると今のほうが授業の質が高くなったのかというと必ずしもそうとはいえません。

ひと昔前までは、大学の講義でも公認会計士や税理士の受験勉強でも、テキストを読むときは「なるほど」と納得して次のページに進んだものです。それが今は「なぜ?」と首をかしげながらページをめくることも少なくないのではないのでしょうか。

損益法、今では収益費用アプローチとよばれることもある「企業会計原則」の世界は、昔は「近代会計」の代名詞でした。ところが、いつの間にか資産負債アプローチが台頭し、収益費用アプローチとの綱引きが始まりました。会計基準のグロ

ーバル化とかIFRSとのコンバージェンスとか、理由はいろいろ挙げられていますが、ではそのためになぜ2つのアプローチが混在することになってしまったのか、そのことに明確に答えているテキストはそれほど多くありません。

大昔に時代遅れなものとして退けられた財産法と資産負債アプローチはどう違うのか、そもそも資産負債アプローチとは何か、これからの企業会計はどこへ向かうのか、そのような疑問に対する答えを読者が求めているということが、冒頭の拙編著の売れ行きの一因になっているのかもしれない。

■会計基準変遷の目撃者として

日本の会計基準は、金融庁（昔は大蔵省、その後財務省）の諮問機関である企業会計審議会で策定されてきましたが、2001年からは民間の組織である企業会計基準委員会（ASBJ）で策定されています。私は1994年の企業会計審議会の幹事就任を振り出しに、現在に至るまで実に四半世紀近くにかかわってきました。

また国内の基準だけでなく、2001年からの8年間は国際会計基準審議会（IASB）の基準諮問会議の委員も務めましたし、同時多発テロが起こった2001年にはアメリカの財務会計基準審議会（FASB）に客員フェローとして1年間滞在していました。この年は、FASBがそれまで40年償却だったのれんの償却を止めて、減損処理だけの会計基準に切り替えた特筆すべき年でした。

そのような意味では、私は会計基準の世界的な激動の時代に、基準設定をめぐる激しい議論の現場に直接に立ち会うことができた数少ない歴史の証人といえるのかもしれません。そのような貴重な体験をした者として、本来なら後世に記録を残す責任があるのですが、なかなか思うような時間を作れないのが悩みの種です。

■キャリアのスタート：公認会計士の道へ

会計の世界にこれほど長く深くかかわるようになったきっかけは、学部時代に受けた公認会計士

の2次試験でした。ただしそのことが、その後の自分の人生をこれほど大きく決定づけることになるとは、その時は全く予想もしていませんでした。大学3年のときにいよいよ将来の職業のことを考えざるをえない段になって、なんとなく挑戦したのが公認会計士試験だったのです。

団塊の世代の大学進学率は男女合わせても2割程度で、女性の進学率はそれよりかなり低かったと思います。母校の経済・商学部系の女子学生の比率は1%でしたし、その花形就職先といえば、外資系の企業の社長秘書のような仕事だった時代です。かりに男性と肩を並べる職業に就いたとしても、いずれグラスシーリング（ガラスの天井）にぶつかることは目に見えていました。

資格は女性が一生働き続けるための武器になる、そう考えた時に目の前にあったのが公認会計士試験でした。まだ日本には女性会計士の数が30人に満たない時代だったといったら驚かれるでしょうが、そういう時代に資格試験にチャレンジしたのは、我ながら先見の明があったと思います。大学4年からは非常勤で監査法人で働き始めましたが、珍しい女性会計士として、往査先でのエピソードにはこと欠きません。往査先の経理部長さんとの飲み比べなどは、今となっては懐かしい思い出です。

■研究者の道に誘ってくれた友人

その一方で、もう1つの転機が訪れたのは、大学4年の夏休みのことです。公認会計士試験が終わってホッとしていた頃だったと思います。たまたま出かけて行った大学でバッタリ出会った友人が、大学院進学の準備をしているとのこと。商家で育った自分とは違って、典型的な知識人の家庭に育った彼女の話を聞いているうちに、人間にはそんな生き方もあるのかと、ハッと目を覚まさせられるような思いでした。それなら自分もチャレンジしてみようと決心し、猛勉強をして大学院に進学しました。

それからの約6年間は公認会計士と大学院生という二足のわらじを履くことになりました。最近では、学界と公認会計士の世界を行ったり来たり

することもごく普通の話になりましたが、その当時は、海外ではいざ知らず、日本ではごく稀な例だったと思います。今でこそ、大学発ベンチャーが脚光を浴びる時代になりましたが、当時は、実務と学問の間には厚い壁が横たわっていました。

進学先の大学院で籍を置いた経済学研究科では、カルチャーショックの連続でした。研究科の共通試験で入学した同期の約30人のうち会計学専攻は自分1人。経済学やファイナンスを専攻している人たちとディスカッションをしているうちに、次第に商学部の簿記的な発想を一度崩して会計学や会計現象を相対化して捉える必要性を痛感させられるようになりました。公認会計士試験の勉強で知っていると思い込んでいたことは、実は全く何も知らないに等しかったということがわかったこと自体が新しい収穫でした。

ただし、その代償として、学部時代のように教科書を素直に受け入れることができなくなり、何事も裏から疑って考える癖がついてしまったような気がします。何に対してもロジックの矛盾のほうが先に目について、とことん納得するまで追究しないと気が済まない可愛げのない性格になってしまいました。もっとも、それが意外と心地よく感じられるのは、実はこちらのほうが自分の性に合っていたのかもしれない。そのような意味では、早いうちに自分の適性を見つけられたのはラッキーでした。

■専門性のパラドクス

今でも肝に銘じているのは、大学院時代の恩師の言葉です。中でも「会計という窓を通して世の中をみることによって社会の本質をよりの確につかむことができる。」という言葉は、折に触れ想い出します。ちょうど写真家がカメラのファインダー越しに撮った写真が被写体をじかにみるよりその本質をよりの確に映し出すことができるように。今の世の中をみていると、会計という専門知識の強みはますます増しているように思われます。

ただし、専門性をもって生きることの強みは、何も複雑な専門知識が役に立つという意味だけではありません。**むしろ本当に物事の本質がわかっている人は、物事をわかりやすく解き明かせる人だと思っています。**私が好きな言葉に、故井上ひさしさんの残した劇作家の心得があります。「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく…」格言はまだ続きますが、この前半部分は、まさに研究者あるいは専門性をもって生きる人々が肝に銘じるべき名言だと思います。

会計という窓を通してつかみとった現代社会の状況を、冒頭の拙編著がどれだけやさしく深く解き明かしているのか、甚だ自信はありませんが、もしこの本の読者が難しいと感じたとしたら、まだまだ私の修行が足りないということだと思えます。いずれにせよ、**日々の仕事の中で専門性を活かして新しい発見や気づきに出会えることほど幸せなことはありません。**

■迷ったときには険しいほうの道を選ぶ

振り返ると、能天気な暮らししていた10代までを別にすれば、20代では資格、30代ではもっぱら子育て、40代では子育てと研究、50代では研究と教育、そして社会活動、60代の今は主として自分の専門を活かした社会貢献というように、いつも10年単位で人生デザインをしてきたような気がします。結果的には、その時代のちょっと先を走ってきたような気もしますが、**ひとつ言えることは、岐路に立った時にはできるだけ険しいほうの道を選ぶようにしてきたということです。**

選ぶまではとことん考える。選んだあとはそれがベストチョイスだったと信じて後ろを振り向かない。そうすると、自分でも驚くような成果がいつか向こうからやってくるものです。結果は後からついてくる、そう信じて、まずは目の前の課題に1つひとつ全力で取り組んでください。